HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「台湾同胞はわれらの骨肉の兄弟！」 : 連関画『心向北京』にみる両岸関係
Author(s)	池田, 真衣
Citation	連環画研究, 3, 38-54
Issue Date	2014-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98399
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98399
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_3_38-54.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第 3 号　2014 年 3 月

「台湾同胞はわれらの骨肉の兄弟！」
――連環画『心向北京』にみる両岸関係

池田　真衣

■連環画『心向北京』

1977 年に上海人民出版社より出版された連環画『心向北京（心は北京に）』は、台湾を中華人民共和国に併合せんとする中国共産党の政治的意図を存分に表現した作品である。台湾人民の苦難、「毛主席」と共産党への敬愛、家族の絆と友情、そして白熱するバスケットボールの試合……といった内容が、130 コマにぎっしりと詰まっている。本稿は、この『心向北京』における両岸関係の描かれ方を、当時の政治状況から読み解こうと試みるものである。物語は、1975 年 9 月に北京で開催された中華人民共和国第三届運動会[1]（全運会）を舞台とし、アメリカで暮らす「台湾省籍」の阿土が、全運会への参加を機に、人民解放軍のバスケットチーム“東風”や、世界各地からやって来た「台湾同胞」との友情を深め合い、「同胞」たちとともに、「台湾解放」と「祖国統一」のために団結し戦うことを決意するまでを描く。もう少し詳しく見どころを紹介しよう。



▲ 連環画『心向北京』の表紙

大陸で生活する台湾省籍の阿龍は、全運会の台湾省体育代表団を代表して、かつて台湾に居たころのバスケット仲間で、いまはアメリカで暮らしている親友の阿土をバスケットチームのコーチとして招聘する。物語は、阿龍と、その息子であり台湾省代表のバスケット選手である台苗が、「台湾同胞」阿土と 18 年ぶりの再会を果たす


▲ 5 コマ目。阿龍、台苗が阿土を飛行場で出迎え

場面から始まる（前頁、5コマ目）。

阿土は、阿龍と台苗のふたりが社会主義の祖国で幸せに暮らす姿を見て喜ぶと同時に、台苗の実の父であり、公私ともに仲良くしていたアマチュアバスケットチームの元コーチ・温火炭との日々を思い起こす。



▲ 17 コマ目。温火炭の妻は生活に困窮し、長いあいだ血を売っていた。しかし、その相手は貪欲な彭社長。彼女は血を吸い尽くされ、売血受領証の束のみを遺し、死んでしまう……。血のしたたる売血受領証が、残酷さとともに、火炭の絶望をも物語る。

――18 年前、国民党統治下の台湾。生活が困窮していたために、火炭は妻を失う（17 コマ目）。だが、悲劇はそれだけでは終わらなかった。米軍チームとの試合で起きた乱闘騒ぎが原因で、火炭は重傷を負い、職を失い、ついに、二歳になったばかりのひとり息子・台苗を遺して、こと切れてしまう……。阿龍と阿土は、台苗を連れて、横浜にいるという台苗の叔父を探すため日本へ旅立つ。しかし、叔父の行方は分からず、阿龍は台苗を連れて祖国である大陸へ帰り、育てることを決意したのであった。

――現在。阿土の大陸での体験は、感動の連続であった。世界各地からやって来た台湾省籍の「同胞」たちとの懇親会では、「同胞」たちと互いに友情を深め合い（48 コマ目）、バスケットチームの訓練では、台苗のプレイ中の姿に火炭の姿を重ね合わせては感慨に浸る（62 コマ目）。

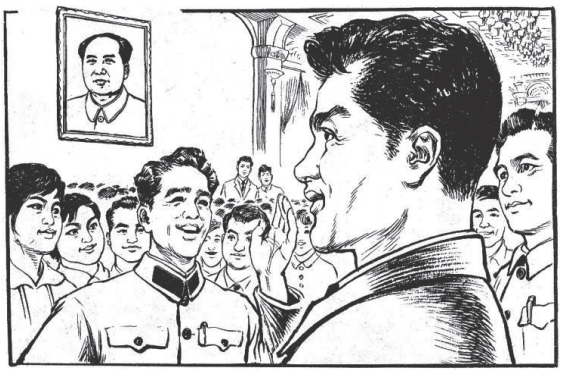




▲ 48 コマ目。1975 年 8 月 29 日に人民大会堂で実際に行なわれた懇親会の様子を描いたものであると思われる。マオタイ酒で乾杯。

◀ 62 コマ目。感慨に浸る阿土の感情は高まり続け、斜め上を見やるお決まりのポーズをとりながら心の中で叫ぶ。「台苗よ、おまえに今日があるのは、まさにおまえが社会主義の祖国に育ったからなのだ！」

全運会開幕を控えたある日、人民大会堂で中央指導者に接見した台湾省体育代表団たちは、迎賓館に帰ったあとも興奮がおさまらず、会議場に集まって感想を語り合っていた。阿土は、「台湾同胞」たちの活発な発言を聞き、会議場の正面に掛けられた毛主席の肖像をじっと見ていると、心中、火のような熱い感情が湧き上がって来る（70コマ目）。そして、阿土は語り出した。高雄の劣悪な労働環境のなかで働く阿土の娘・台麗が体験した出来事を……。



▲ 70コマ目。毛沢東の肖像を見つめる阿土。阿龍（右）や台苗、“東風”の李コーチ（中央）も参加している。



▲ 96コマ目。同僚の死をきっかけに、不満が爆発した労働者たちは、視察に来た“省長官”や社長を取囲む。

——6年前。台麗は火炭の妻を死に追いやった悪徳社長・彭孟財の工場で働いていた。彭は利益のためには労働者の生死を顧みない。そのような劣悪な労働環境のなかで台麗の友人・阿菜は、命を落としてしまう。この事件をきっかけとして、台麗や阿土の弟・火生、そして労働者たちはストライキを始め、「反蒋［介石］愛国闘争」に目覚めたのであった。（96コマ目）

——現在。阿土の話を聞いた「同胞」たちは、「台湾解放」と「祖国統一」のために団結し戦うことを決意する。（112コマ目）。

全運会が成功裏に終わり、代表団は各地を参観してからそれぞれの国に帰る。阿土も、阿龍と台苗に向かって「わたしは必ず祖国の人民の台湾に対する深く厚い友情を持ち帰り、海外華僑の同胞、台湾同胞を団結させ、ともに台湾解放、祖

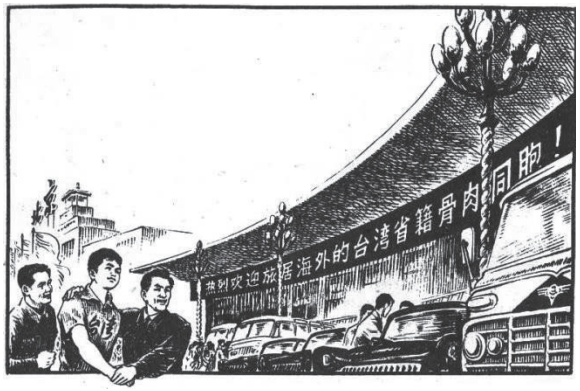


▲ 112コマ目。日本、アメリカ、西ドイツ、カナダなどからやって来た台湾省籍の華僑、および祖国の大陸で暮らす台湾省籍の「同胞」が手を取り合い、抱擁して団結を誓う。

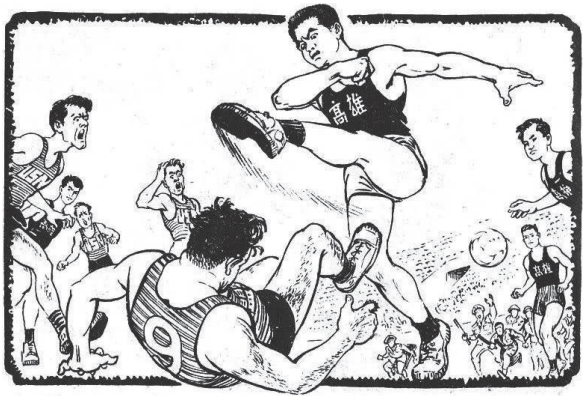
国統一の神聖な事業のために戦います！」と告げてアメリカへ帰国するのであった。

以上が、『心向北京』のハイライトである。物語の途中、18 年前や 6 年前を回想する場面があるが、その場合、現在のシーンと比べて枠が太く、角がまるい。過去の出来事であることが、一目見て分かるような処理が施されている（本頁 24 コマ目、86 コマ目など）。

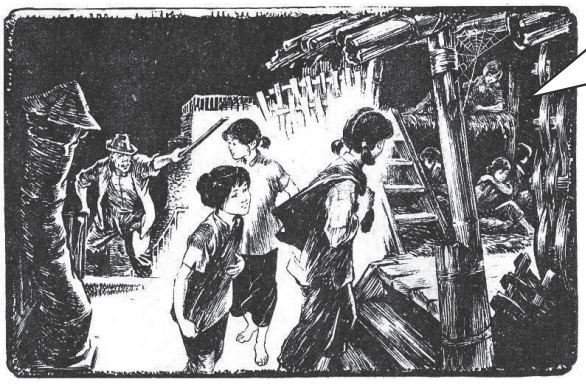
この作品は、文革期に特有の語り口[2]もさることながら、計算された構図や、躍動感あふれる絵も見どころのひとつである。



▸ 8 コマ目。「熱烈歓迎旅居海外的台湾省籍骨肉同胞！（海外在住の台湾省籍骨肉同胞を熱烈に歓迎いたします！）」と書かれた横断幕の前で、阿土は台苗の肩を抱き手をとる。「骨肉同胞」の絆を強調するかのように、つながれた手が枠からはみ出ている。

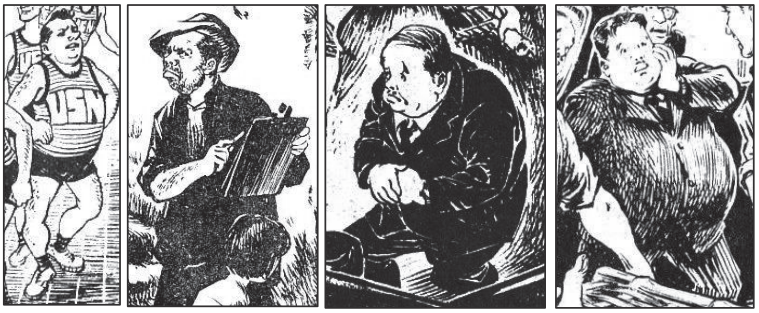


◂ 24 コマ目。18 年前の台湾。米軍との試合中、度重なる反則行為に、怒り心頭に発した阿龍が「チビの米軍」を蹴倒す。ローアングルの構図、そして勢いあまって枠から飛び出した米軍選手の姿が、阿龍の蹴りの威力を強調している。





◂ 86 コマ目。6 年前の台湾。杖を振るう職業斡旋のお頭と、クモの巣の張る寮内、そのなかでうずくまり暗い顔をしている女の子たちの表情、そのどれもが労働環境の劣悪さを物語る。



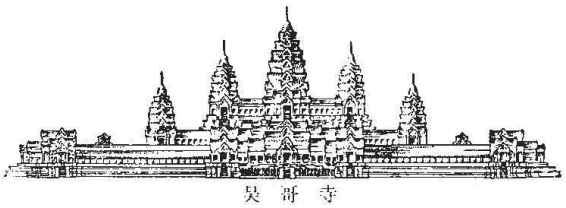
◀ 憎めない顔をした悪者たち。シリアスな場面でもコミカルに。左から反則行為を繰り返す米軍チームの 9 番（20 コマ目）、職業斡旋のお頭（87 コマ目）、悪徳社長・彭孟財（94 コマ目）、「蒋一味の“省長官”」（98 コマ目）

これらの絵を描いた楊英鏢について、簡単に紹介しておきたい[3]。楊英鏢は 1931 年 6 月、台湾の宜蘭市に生まれた。上海同済大学建築系を卒業した後、上海人民美術出版社の基本専業画家や、上海『辞海』編輯所建築部門特約画家【図 1】、北京人民美術出版社連環画特約画家、上海『文匯報』、『新民晩報』特約画家などを務め、1970 年からは上海市美術学校（現上海大学美術学院）の絵画班主任を七年間担当した。1982 年に中国を離れ、日本の金城大学美術学科の教授として九年間在籍（1990 年には日本国の永住権を取得）し、米国コロンビア大学東方芸術学科の客員教授などを経て、現在は台湾に活動の拠点を移している。楊英鏢の作品は、大陸での活動時期に、1975 年全国年画展にて特選賞（受賞作「骨肉情深」は北京美術館収蔵）、大陸から離れてからは、仏画の制作を主とし、日本、イギリス、フランスなど各国で数多くの賞を受賞している【図 2】。

連環画においては、処女作『三勇士』（1954）をはじめとして、82 年の出国までに発行した作品は 63 種に及ぶ。そのうち本作『心向北京』は、100 万冊を売りあげるほどの人気を博し、楊英鏢の代表作となった[4]。



『心向北京』の内容や絵師・楊英鏢については、ひとまず、このくらいに止めておいて、ここからは、この作品のテーマについて語りたい。



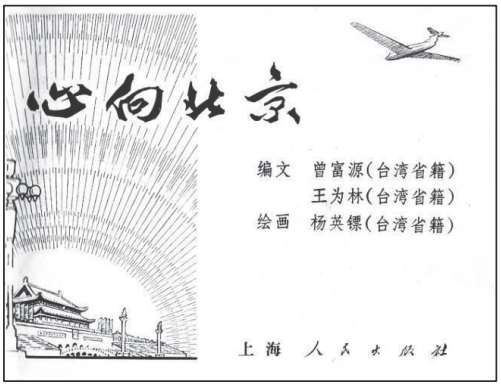
（上）【図 1】楊英鏢が手掛けた『辞海』の挿絵。世界名建築部門 60 余図のうちのひとつアンコールワット

（左）【図 2】1991 年 5 月、東京にて「国際芸術文化賞」を受賞した楊英鏢氏

■『心向北京』が描かれた時代背景

『心向北京』は、冒頭に「われわれは必ず台湾を解放せねばならない[5]」という毛沢東のことばと、「われわれは、台湾を解放し祖国を統一するという神聖な事業を必ず成し遂げなくてはならない[6]」という華国鋒のことばを掲げていることから、そのテーマは明白なものであり、またそれらの政治的立場に与する作品であることが読み取れる。

さらに、編文、絵画を担当する三人の名前の横には「台湾省籍」であることが示されている（中表紙）。そのため、“「台湾省籍」の作者、絵師が、「台湾解放」「祖国統一」を「自ら」望み、制作した連環画”という体で描かれた作品であることが読み取れる。つまり、「台湾省籍の同胞は、みな台湾解放、祖国統一を願っている」といった共産党政府にとって都合のよい主張が込められているということだ。このような主張は、前掲の 112 コマ目などにも反映されている。また、中表紙に描かれた「光を放つ天安門」（北京）に向かって飛行機が向かって来る（大陸へ帰って来る）という構図も、作品のテーマ性を非常によく表している。



▲ 中表紙

ここで少し、「大陸」と「台湾」の関係や、『心向北京』が描かれた当時の政治状況を簡単に説明しよう。

台湾海峡を挟んだ「大陸」と「台湾」の関係は、「両岸関係」と称される。1949 年の新中国成立以降、両岸間は、幾度となく一触即発の危機にみまわれた。これは、「中華人民共和国」と「中華民国」の双方が「中国はひとつ」であると考え、互いにその存在を認めていなかったためである[7]。

1949 年、新中国が成立してまもなく、国民党政府は、台北に「臨時首都」を遷都した。共産党軍に敗北はしたものの、第二次世界大戦の戦勝国である中華民国は、国連の常任理事国であり、対外的には中華人民共和国よりも優位な立場にあった。つまり、「正統な中国政府」として認められていたのである。しかし、1971 年 10 月に中華人民共和国の国連加盟が決定すると、状況は一変する。中華民国は、「中国」の代表権を喪失し、国連を脱退したのである。さらに、1972 年 2 月には「（米国は）台湾海峡両岸のすべての中国人が、中国はただひとつであり、台湾は中国の一部であると主張していることを認識する。」という米中共同声明が発表され、1972 年 9 月には、日本が中国と国交を結び、「日本国政府は中華人民共和国政府が中国の唯一の合法政

府であることを承認する」（日中共同声明）として、中華民国との国交を断絶させた。

1977 年に出版された『心向北京』は、中華人民共和国が国連に加盟し、これまで中華民国を支持していた米国には両岸関係における自国の主張を認識させ、日本にはそれを承認させた、いわば対外的に中華民国よりも優位に立った時代に描かれた作品である。連環画とは、政治状況を映す鏡であり、当然ながら、この一連の出来事の前後において、「両岸関係」の描かれ方も変化していることだろう。ここからは、『心向北京』における両岸関係の描かれ方を読み解くために、国連加盟前に描かれた「台湾解放」をテーマとしたほかの連環画や宣伝画と比較していこう。

■虐げられる台湾人民　――「台湾解放」をテーマとした連環画の特徴

先に示したように、『心向北京』には、国民党政権下で苦しむ台湾の人びとが描かれている。このように、「虐げられる台湾人民」を描き出すことは、「台湾解放」をテーマとした連環画において、お決まりのパターンである。【図 4】から【図 10】をご覧いただきたい。



（右）【図 4】19 世紀末、日本統治下の台湾。「日本鬼子」は中国の学校を封鎖し、中国語の刊行物の出版を禁じ、武力でもって住民を街から追い出す。（『雨過天青』、1951 年、12 コマ目）





（右）【図 5】日本から解放されるも、アメリカの支配を受ける台湾。大陸の「解放事業」を阻止するため、アメリカは「鬼子」を教官として雇い、台湾の青年たちを無理やり訓練させている。（同 26 コマ目）
（左）【図 6】国民党統治下の貧しい台湾人民。彼らが生きていくためには、血を売るほかない。（『祖国的台湾』、1955 年、45 コマ目）



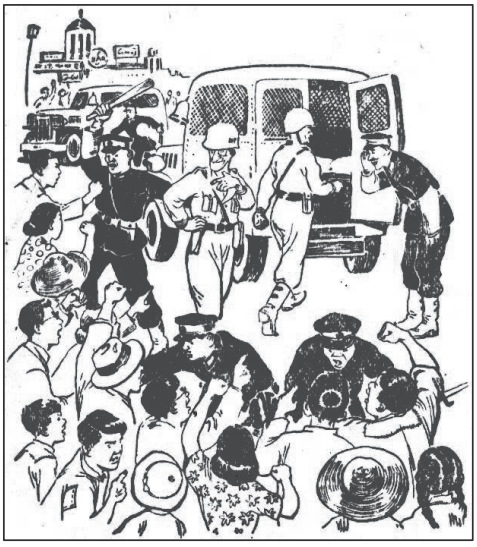
（右）【図 7】日本統治下、日本語教育を強いられる台湾のこどもたち。手前の生徒は拳を握り怒りを表している。（『台湾人』、1956 年、3 コマ目）



（左）【図 8】飛行場建設のため、強制立ち退きを強いられる貧しい父子。「三日以内に立ち退かないと家に火を放つぞ！」と脅される。国民党の警察は手段を選ばない。（『一個台北的孩子』、1957 年、2 コマ目）



（右）【図 9】国民党政権下の台湾で餓死寸前の人びと。後ろには、アメリカ国旗がはためく船と、昼間から飲んだくれるアメリカ兵らしき姿が見える。そのコントラストが米軍への憎悪と台湾人民への同情を誘う。（『一定要解放台湾』、1958 年、16 コマ目）



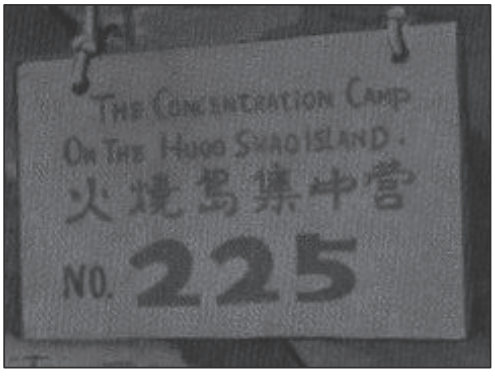
（左）【図 10】米軍の MP は台湾人を殴る蹴るのやりたい放題だが、国民党の警察は人民を助けるどころか、MP に媚びへつらってばかりである。台湾人民は拳をふりあげて怒りを露わにしている（『台湾人民在闘争』、1958 年、12 コマ目）

このように、「台湾解放」をテーマとする連環画は、「台湾人民が“日本”、“国民党”、“アメリカ”などから虐げられていること」を強調し、「台湾解放」の正当性を訴えているのである。

いまひとつ、宣伝画「堅決解放台湾・拯救苦難中的台湾人民！（必ず台湾を解放し、苦難のなかにある台湾人民を救おう！）」（胡今葉作、1955 年 1 月）【図 11】を例にあげたい。



【図 11】国民党に虐げられる台湾女性



【図 11-a】囚人の証



【図 11-b】「青天白日」の腕章

これは、政治犯収容所のある火焼島で、台湾の女性囚人が国民党にいたぶられている様子を表している（女性が首から下げている「火焼島集中営　No.225」という札が政治犯収容所の囚人であることを示している【図 11-a】）。女性の後ろにも、何人かの囚人たちが、国民党の証である「青天白日」の腕章をつけた人物によって懲罰を受けているのが見える【図 11-b】。後ろ手に縛りあげられ、苦悶の表情を浮かべるこの女性の姿は、非常に生々しく、見るものに「国民党」への恐怖と「台湾解放」への使命感を与えたことだろう。

このような連環画や宣伝画を通して、共産党は、国民党政権下での「政治的な圧力に苦しむ台湾人民」や、「貧困に喘ぐ台湾人民」を中国人民に喧伝することによって、大陸で生活することの素晴らしさを説くとともに、「台湾解放」の正当性を主張しているのである。

■台湾同胞はわれらの骨肉の兄弟

さて、話を『心向北京』に戻そう。まずは、49 コマ目をご覧いただきたい。これは、世界各地から集まった台湾省籍の「同胞」たちとの懇親会での一場面である。



（49）宴会のあと、各地からやって来た台湾同胞は熱心に語り合っています。スピーカーからは感動的な歌が流れてきました。「私は海岸に立ち、祖国の台湾省を遥かに見渡す、日月潭の碧い波が心のなかで揺れ動き、阿里山の木々の揺れる音が耳もとで響く、台湾同胞、わが骨肉の兄弟、われわれは日夜あなたたちを気にかけている……」[8]

◀「台湾同胞我的骨肉兄弟」と書かれたページを指している。

作中、「台湾同胞」が聴いているのは、「台湾同胞我的骨肉兄弟（台湾同胞はわたしの骨肉の兄弟）」（于宗信作詞、釗邦作曲、1972 年）という革命歌である。49 コマ目の歌詞はこの歌の前半部で、ゆったりと歌われるが、後半部は一転、テンポが速くなり、内容も台湾解放を訴えるものに変わり、最後は「われわれが必ず台湾を解放し、あの太陽の輝きを台湾島に照らすのだ[9]」という歌詞で、力強く締めくくられる。この曲は、1970、80 年代、芸術団体が外国で公演する際、プログラムのなかに必ず入れられていたものであり[10]、また『心向北京』の出版年・1977 年に公開された、「台湾

解放」をテーマとした映画「藍天防線」の挿入歌にもなっている。当時の政治主張を色濃く反映した、いわば共産党お墨付きの歌と言えよう。この歌の歌詞のように、『心向北京』では、「台湾同胞」に対して、「骨肉」や「兄弟」など非常に親しみを込めたことばを使用している。「台湾同胞」に対するこのような呼称は、当時の宣伝画にもよく使用されていた【図 12】。

【図 12】の宣伝画は、双方の表情がにこやかで、友好ムードが漂うものであり、【図 11】で見たような残虐な雰囲気のものとは異なる。また、【図 13】から【図 15】のような、従来の「台湾解放」をテーマとした連環画や宣伝画にみられる戦闘的な様子も見られない。

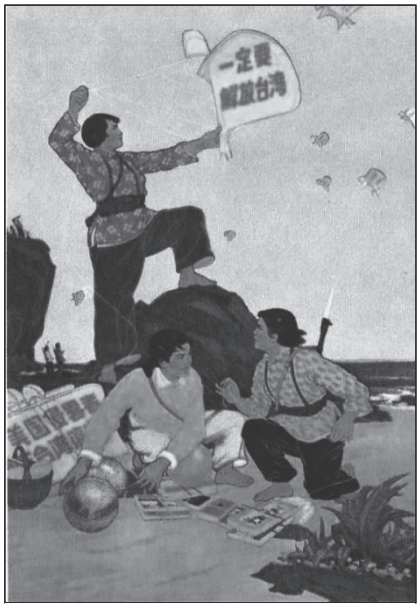


【図 12】「台湾同胞是我們的骨肉兄弟」（王慎仁作、1978 年）
▲人民服の女性は「大陸」を、台湾の先住民族・高山族の衣裳を身にまとった女性は「台湾」を表している。



【図 13】連環画『祖国的台湾』（56 コマ目）

▲ 台湾島を占拠する米軍と蒋介石に向けて、人民の代表である農民、労働者、解放軍がおのおの凶器を突きつける。後ろには「全中国六万万人民団結起来（全中国六億人の人民よ団結せよ）」「［一］定要解放台湾！（必ず台湾を解放せよ！）」と書かれた横断幕を掲げる人民たち。六億の人民が団結すれば、巨大な力となることを表している。



【図 14】宣伝画「対敵宣伝員」（陳運義作、1966 年）

▶ 台湾へ向けて凧や風船を飛ばす宣伝員の女性たち。凧には「一定要解放台湾」「美国侵略者［従］台湾滾［出去］（アメリカ侵略者は台湾から出て行け）」と書かれている。砂浜に置いてある本も風船と一緒に飛ばすようだ。



【図 15】宣伝画「一定要解放台湾！」（南京部隊空軍紅鷹、1971 年 1 月）

◂ 文革期の宣伝画。奥には「紅書」を手に台湾解放を誓うパイロット、手前には銃を手にする男女。空には戦闘機が飛んでいる。

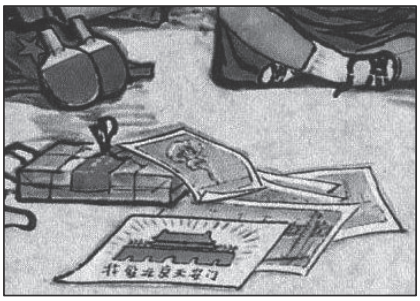
いまひとつ、宣伝画「信兒捎給台湾小朋友（台湾のこどもたちにお手紙を届けよう）」【図 16】をご覧いただきたい。これは、【図 12】と同じく、「中華人民共和国」が国連に加盟し、「中華人民共和国が中国の唯一の政府である」という主張を諸外国が認識あるいは承認するようになった後のものである。





◂ 紅領巾と紅小兵バッジをつけた男の子が手にする封筒には「寄給　台湾小朋友　光明小学（台湾のおともだちへ　光明小学校より）」の文字。

▾ 友好の印「ピンポン」のラケット、中国の科学技術を知らせる写真（？）、光を放つ天安門の絵、五星紅旗……中国の「いま」を伝えるたくさんのものを鞄につめこんでとどけよう！



【図 16】宣伝画「信兒捎給台湾小朋友」（謝従栄、林永権作、1974 年）

右上には「信兒捎給台湾小朋友」という同名の歌（王嘉楨作詞、史宗毅作曲）の歌詞が書かれている。

紅い風船　緑の風船　どうか手紙を届けておくれ
高い山越え海を越え　台湾のこどもたちに伝えておくれ
妹よ弟よ　わたしたちはみな親骨肉（きょうだい）
美しい紅い旗は　紅小兵みずから刺繍した
台湾は速やかに解放を
わたしたちは肩を並べ　五星紅旗を阿里山の頂に掲げよう
愉快な歌は　紅小兵が書いた一曲
祖国は早く統一を
わたしたちは手をつなぎ　勝利を祝って金水橋のたもとで高らかに歌おう[11]

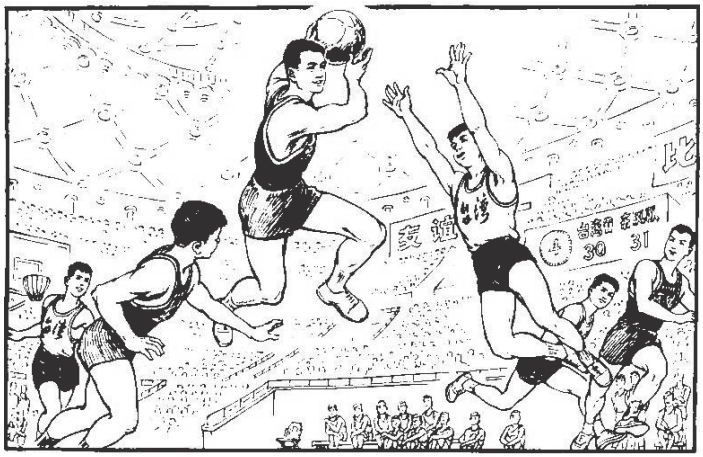
（下線は池田による）

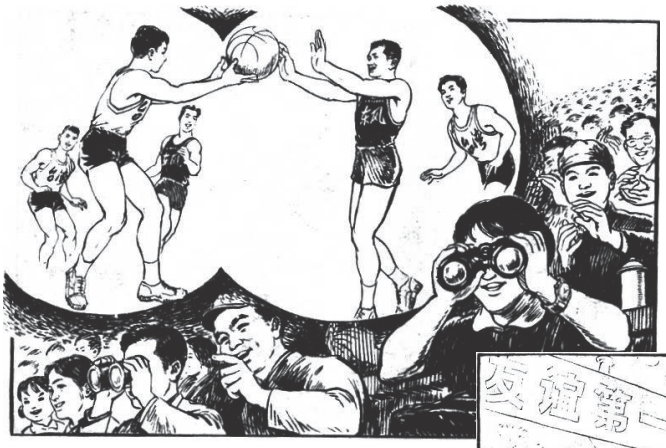
【図 16】は、【図 14】と同じく台湾に向けて風船を飛ばす準備をしているところを描いているが、その表情は相反するものである。【図 14】の「対敵宣伝員」の女性たちは、銃剣を背負い、文字通り「敵」に向けて、凛々しい顔つきで凧をあげているが、【図 16】のこどもたちは、みな海の向こうのまだ見ぬ「妹」や「弟」に向け、ニコニコとした表情を浮かべている。このような、「兄」「姉」である「大陸」、「弟」「妹」である「台湾」という構図は【図 12】においても、同様である。【図 12】の場合、背の高さから「大陸」が「姉」、「台湾」が「妹」であることが見てとれる。

このように、諸外国を味方につけ、対外的に優位な立場となってからの中国の宣伝画は、「台湾」を、「骨肉」「兄弟」「姉妹」などと笑みを浮かべながら呼称し、自らは年長者気取りで、余裕たっぷりなのである[12]。

さて、『心向北京』では、全運会の本番で、人民解放軍のチーム“東風”と台湾省チームがバスケットを通して「戦い」を繰り広げる。フィクションと言えども、いわば「大陸」対「台湾」の「戦い」である。しかし、その白熱した試合は、終始笑顔で行なわれ、「友谊第一 比赛第二（友情第一、試合は第二）」という全運会の方針のもと、勝敗はうやむやとなり、双方が骨肉の深い友情を結び、喜びのなか終焉を迎えている[13]。これは、一見したところ、「台湾」を「仲良くすべき相手」として描いているように見えるが、その実、「台湾」を「戦うべき相手」ではなく、「戦うまでもない相手」としてとらえているのである。「勝ち負けなんて、どうでもいいではないか」という態度に【図 12】や【図 16】のような格下のものへの余裕が感じられる。

▸ 115 コマ目。“東風”対台湾省の試合は、点をとられてはとりかえすという非常に「切迫し激烈なもの」であったが、絵のなかの選手たちは、終始笑顔を浮かべている。とても戦っているようには見えない。





◂ 118 コマ目。台苗は倒れてしまった相手選手をかばうため、ボールを放りなげてしまう。台苗がボールを受け取ってから、“東風”のメンバーに渡すと、相手選手は受け取ろうとせず、ふたりは互いに譲り合う。彼らを見つめる観衆たちもみな笑顔を絶やさない。



▸ 120 コマ目。「これこそ正真正銘の試合だ！」阿土は生涯ではじめてこのような友好的な試合を目にして感激する。後ろには、「友誼第一　比賽第二」という全運会のスローガンが。

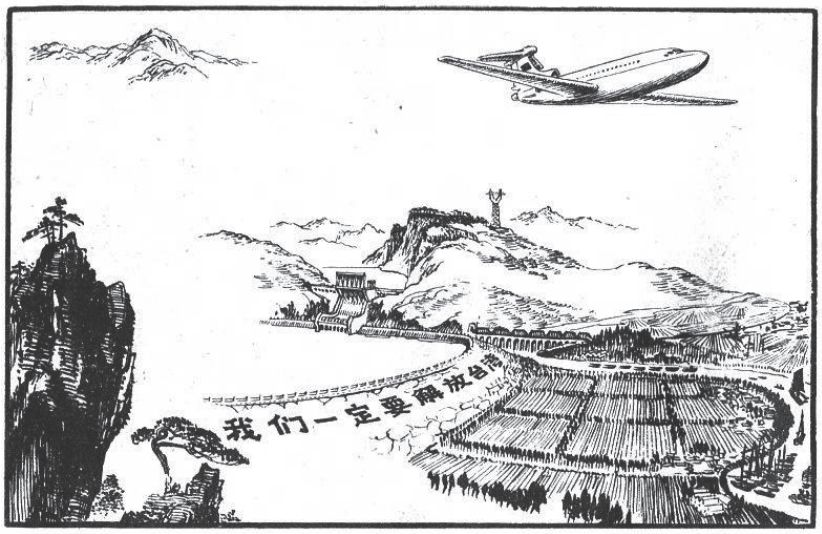


◂ 121 コマ目。「試合は終了しました。人々が双方の勝敗をスコアから判断するのは難しいことでした。これについては、双方のメンバーの状況を見れば明らかでしょう。彼らはこのように熱烈に抱擁し、このように真摯に相手を祝福しています……彼らはみな心に骨肉の深い友情を刻んだのです！[14]」……と、結局、勝敗はうやむやのままに。

■おわりに

本稿は、『心向北京』における両岸関係の描かれ方を、国連加盟前に出版された連環画、宣伝画との比較を通じて、国連加盟前には「戦うべき相手」だった「台湾」が、国連加盟後に出版された本作では「戦うまでもない相手」として描かれていることを指摘した。その余裕のある態度は、「骨肉の兄弟」といった「台湾」への親しみを込めた呼称にも現れている。あるいは、諸外国から「正統な中国政府」として認められた共産党政府が、「台湾」を平和的に併合するべく、「台湾人民」と友好的な関係を築こうと画策していたことを読み取ってもいいだろう。このような政治的意図を連環画に詰め込んだ結果、貼りつけたような笑顔をした選手や観客、勝ち負けのない珍妙な試合が生み出されてしまったのかもしれない。

ところで、『心向北京』では、「台湾解放もの」のお決まりのパターンである「国民党から虐げられる台湾」や「アメリカから虐げられていた台湾」は描くものの、「日本から虐げられていた台湾」は描かれておらず、むしろ、友好的な交流が不必要に強調されている。『心向北京』におけるこうした「日本」のイメージについては、また別の機会に論じたい。



図版出典

【図 1、2】楊英鏢著『画業四十年　楊英鏢画集』（英鏢芸術研究所、1995 年）
【図 3、8】梁学政原著“台北的黄昏”改編、楊英鏢／画『一個台北的孩子』（上海人民美術出版社、1957 年）
【図 4、5】藩思同／絵、黄廷堅／編文『雨過天青　即台湾人民的苦難』（電化教育出版社、1951 年）
【図 6、13】遼寧省美術工作室、馮国琳、劉宝印など／合絵『祖国的台湾　台湾是中国的領土、中国人民一定要解放台湾！』（東北画報社、1955 年）
【図 7】胡克文／絵、呉英柔／文『台湾人』（上海人民美術出版社、1956 年）
【図 9】上海人民出版社／編絵『一定要解放台湾　図画唱本』（上海人民美術出版社、1958 年）
【図 10】少年児童出版社／編、毛用坤、陳希旦／絵図『台湾人民在闘争』（少年児童出版社、1958 年）
【図 11、15】Marien van der Heijden, Stefan R. Landsberger, Kuiyi Shen, *Chinese Posters. The IISH-Landsberger Collections* (Prestel, 2009)
【図 12】chineseposters.net
【図 14】陸克勤編著『新年画図録――中国年的記憶』（上海書店出版社、2008 年）
【図 16】蕭悟了著『激情時尚――70 年代中国人的芸術与生活』（山東画報出版社、2002 年）

注釈

[1] 第三届全運会は 1975 年 9 月に北京で開催された。実際、この第三届全運会に初めて台湾省籍の選手が世界各国から召集されたことが連日『人民日報』にて報道されている。「为参加第三届全国运动会 台湾体育代表团筹备处在京成立（第三届全国運動会への参加に向け　台湾体育代表団準備室が北京に成立）」（『人民日報』、1975 年 3 月 28 日、第 4 面）をはじめとして、「在毛主席和党中央的亲切关怀下 参加全运会的台湾省体育代表团在京成立 体现了台湾同胞和全国人民的战斗团结，显示了全国人民解放台湾、统一祖国的坚强意志（毛主席と党中央の温かな思いやりのもと　全運会に参加する台湾省体育代表団が北京に成立　台湾同胞と全国人民の戦闘的団結を体現し、全国人民の台湾解放、祖国統一という固い意志を顕示した）」（同 8 月 24 日、第 3 面）、『心向北京』と同じくアメリカからやって来た台湾体育代表団を飛行場で出迎えたと報道する記事「台湾省体育代表团副团长黄于燕 和旅美台湾省体育工作者、运动员到京（台湾省体育代表団副団長・黄于燕と在米台湾省スポーツ関係者、選手が北京に到着）」（同 8 月 29 日、第 4 面）、「第三届全国运动会筹备委员会举行宴会 热烈欢迎台湾省体育代表团 华国锋副总理等出席。席间，同胞们和战友们畅叙骨肉深情，充满了亲人团聚的欢乐气氛（第三届全国運動会準備委員会が宴を催す　台湾省体育代表団を熱烈歓迎　華国鋒副総理などが出席。席上、同胞たちや戦友たちは骨肉の深い友情を温め、家族団欒の楽しい雰囲気に満ち溢れていた）」（同 8 月 30 日、第 2 面）など。9 月には試合や懇親会の状況、10 月には閉幕後の旅行の様子が報道されている。

[2] 文化大革命の期間は、中国政府の見解によれば、1966 年 5 月から 1976 年 10 月までである。しかし、当時、文革の終結が公式に宣言されたのは 1977 年 8 月であったため、1977 年 3 月に出版された『心向北京』にまだ文革の名残がみられることは不思議ではない。

[3] 楊英鏢のプロフィールは、以下を参考にまとめたものである。楊英鏢著『画業四十年　楊英鏢画集』（英鏢芸術研究所、1995年）、「連環画芸術家档案」（『連環画之友』、2002年8月25日、第3面）。

[4] 前掲『画業四十年　楊英鏢画集』参照。

[5] 原文「我们一定要解放台湾」

[6] 原文「我们一定要完成解放台湾、统一祖国的神圣事业」

[7] 李登輝の政策転換以降、台湾は、大陸（中華人民共和国）と台湾（中華民国）を別々の国であると位置づけている。1999年7月、台湾総統である李登輝は、ドイツの放送局でのインタビューのなかで、両岸関係について「国家と国家の関係、少なくとも特殊な国と国との関係」であるという「二国論」を表明した。

[8] 原文「宴会后，来自各地的台湾同胞倾心地交谈着。播音器里播出动人的歌曲：“我站在海岸上，把祖国的台湾省遥望，日月潭碧波在心中荡漾，阿里山林涛在耳边震响，台湾同胞我骨肉兄弟，我们日日夜夜把你们挂在心上……”」

[9] 原文「我们一定要解放台湾，让那太阳的光辉照耀在台湾岛上」

[10] 外国で公演をする際に、このような政治主張のある歌をプログラムに入れることが問題を引き起こしたこともあった。アメリカと正式な国交が成立していなかった1974年、中国芸術団組団がアメリカの民間組織「美中友好協会」の招待を受けて公演した際、事前にプログラムを確認したアメリカ政府から、「台湾同胞我的骨肉兄弟」をほかの曲と差し替えるように言われたが、内政干渉であると批判し、曲目を変更しなかったことで、世界中のメディアが外交事件としてこの歌に注目することとなったという。釗邦「談≪台湾同胞我的骨肉兄弟≫創作与流伝」（『音楽生活』2007年第5期）

[11] 原文「红气球呀绿气球请你捎个信儿走／飞过高山飞过海告诉台湾小朋友／小姐妹呀小兄弟我们都是亲骨肉／美丽的红旗红小兵亲手绣／台湾快快得解放／我们肩并肩把五星红旗升起在阿里山头／欢乐的歌曲红小兵写一首／祖国早早得统一／我们手挽手为庆祝胜利欢唱在金水桥头」。1987年に出版された昳鶯編『史宗毅歌曲選』（海峡文芸出版社、1987年）では、「红小兵」が「少先队员（少年先鋒隊隊員）」に、「台湾快快得解放」が「祖国早早得统一」に変わっている。ちなみに、1975年8月30日、全運会の前に行なわれた北京市体育代表団と台湾省体育代表団の懇親会上で、幼稚園に通う5歳の女の子がこの歌を歌ったことが『人民日報』の記事で確認できる。全運会が舞台である『心向北京』とも関わりのある歌と言えよう。「参加全运会的北京市体育代表团和台湾省体育代表团举行联欢会」（『人民日報』、1975年8月31日、第4面）

[12] 戦闘的な宣伝画がなくなったというわけではない。例えば、「我們一定要完成解放台湾祖国統一的神聖事業」（1977年）は、【図15】と似通った構図で描かれており、戦闘的なムードを漂わせている。

[13] 実際の試合はどうだったのだろうか。『人民日報』による報道では、1975年9月7日、遼寧省と台湾省の男女それぞれのチームが対戦し、どちらも「団結し、友好的な試合」であったという。結果は、男子が119対104、女子が84対67でどちらも遼寧省が勝利している。（「第三届全运会男、女篮球（成年组）决赛　和足球（成年组）决赛在京开始举行」、『人民日報』、1975年9月8日付、第4面）また、同記事や、全運会の試合に関するそのほかの記事においても、選手たちが「友誼第一、試合は第二」の方針を貫徹する姿が報道されている。

[14] 原文「比赛结束了。人们是很难从比分上来判定双方胜负的，这一点，看看双方队员的情况就明了了：他们如此热烈地拥抱，如此真挚地向对方祝贺…… 他们每个人在心坎上记下了这片骨肉深情！」